



9月号

ひだまり

今月のエッセー

愛と恋



「愛と恋の違いって何？」

お盆期間中、親戚一同が集まった折に、高校生になったばかりの従弟から私に発せられた問いです。思春期真っ只中の彼は、もしかしたら恋愛に悩んでいたのかもしれないかもしれません、僧侶である私に、人生をかけた課題をぶつけてきたのかもしれない。

この問いに、皆さんなら何と答えるでしょうか？

もちろん、これには明確な答えは存在しません。人それぞれの経験から生まれてくるその答えは、おそらく千差万別であると思います。

編集後記



早いもので、お彼岸の時期である九月になりました。

「暑さ寒さも彼岸まで」

しかし、実際には九月のお彼岸を過ぎてても残暑が続く年もあります。

ちようどお盆時期のことです。故郷である秋田県に帰省し、お壇家さん参りをした時でした。各家々で、おじいさんやおばあさん達が口を揃えて言っていました。

「今年は特別に暑い。」や「昔は三〇度までしか上がらなかった。」と…。

今年のお彼岸は、昨年比べて涼しくなりそうですが、心配されている温暖化が進まないか心配な今日この頃です。

◆伊藤 正法

発行 曹洞宗総合研究センター教化研修部門

〒一〇五・八五四四

東京都港区芝二・五・二曹洞宗宗務庁内

☎〇三・三四五四・六八四四

しかし、何しろ経験不足な私です。その場で瞬時に「恋は自分中心で、愛は相手中心かなあ」と答えたのですが、従弟は満足してくれませんでした。

それでは、自分はどうか考えているのだと、彼に愛と恋の違いについて尋ねてみました。すると、

「恋は、人間だけが対象で、愛は、人間や動物、植物、物、その全部が対象になっていると思う」
こう答えてくれたのです。

たしかに、人に恋するとはいっても、犬に恋するとは表現しません。その逆に、犬に愛情を注ぐ、愛着のある道具など、愛はすべてのものに注ぐことができます。従弟の答えには、大いに納得するものがあつたのです。

考えてみると、日本では古くから、愛情をもって大切にしてきた物には魂が宿るとされてきました。人形供養や筆供養など、お寺では様々な物の供養が行われています。

もしかしたら、魂とは愛情そのものなのかもしれない。そんなことを感じたお盆でした。

◆竹村 信彦

法のお話



二年度
田代浩潤
たしろこうじゅん

『私は人の間』

自律。意味は文字通り、自分で自分を律すること。何となく禅僧のイメージにマッチしませんか？そんなことを言っておきながら申し訳ありませんが、私は自律が大の苦手です。むしろ自律なんて不可能とさえ思っています。おっと、禅僧失格の烙印はまだ押さないでください。それには訳があります。そこで今回、大本山永平寺での修行時代のことをお話したいと思います。

永平寺に入門して、間もなく一年が経とうかという頃のこと。修行生活では規則や作法がとてつもなく多いので、入門から半年くらいは、間違えたり見落とししたりしては叱られる日々が続きます。でも、物覚えがいいとは決して言えない私でさえ、一年

も経とうかという頃には、それら日々の務めや作法にも慣れ、修行生活の勝手がわかってきます。すると必然的に仕事は早くなり、時間にも余裕が生まれてくるものです。

ある夜、務めを早く終え、翌日の準備も済ませた私は、風呂を浴びに持ち場を離れました。入浴を終え、身も心もさっぱりして持ち場へ戻った途端、出くわした同期の修行僧に叱られたのです。

「まだ仕事終わってない奴がいるだろ？それを差し置いて、何で自分だけ風呂に行つてんだよ！考えろっ！」

永平寺には「自分の務めを終えたら未だ終えていない者を手伝う」という暗黙の了解があったのです。それに私は背いたのでした。

同期の仲間には叱られたことは勿論ショックです。しかし、私がよりショックを受けたのは別のことでした。先にもお話したように、修行道場での務めは複雑極まるものです。それを覚えなければ修行生活は送れません。それら決まりごとを私は自分で努力し、自力で覚え、自分で実践したからこそ、今（一年たった当時）

がある、そして務めを早く終えられたのだと疑い無く思っていました。だから、風呂にも行つていいのだ、と。

しかし、その時仲間には叱られて、厳しい先輩の目や、迷惑を掛けられない、掛けたくない仲間の存在があったからこそ、私は精進出来ていたような気がしたのです。むしろ、彼らがいなかったら何も出来なかったのではないかとさえ思いました。己の無力さを思い知らされたのです。

大衆の威神力

こんな言葉が曹洞宗にはあります。大衆とは共に修行する仲間のことで、その仲間が仏さまの強い力をもたらす、という意味です。私の場合、その時は修行僧全員が仏さまでした。耳に痛いことなど、誰だつて言いたくありません。しかし、敢えてそれを言ってくれる人がいたから、一人では決して出し得ない力を私は發揮出来ていたのでしよう。

人間は一人では悲しい程無力です。もちろん人と共に在れば、時に面倒だつて生じるもの。しかし、周囲の存在によって初めて人は無力ではなくなる、私はそう思うのです。

秋のたからもの

『万年筆』



私のたからものは、写真に写っている万年筆です。大学での最後の課題である、卒業論文を提出し終えた時のことです。住み慣れた埼玉での生活に一区切りをつけ、故郷である秋田に戻る準備をしていました。

そんな折に、一本の電話がかかってきました。出てみると、お世話になった千葉に住んでいる伯母から、「これから寂しくなりますが、体に気をつけ修行頑張ってください。」と言われて当時非常に感動したことを覚えています。

埼玉から荷物を引き上げ、故郷である秋田に戻つてそれ程時間が経たない内に、伯母から私宛の小包が届きました。開けてみるとそこには、真新しい万年筆と手紙が入っていたのです。手紙に綴られていたことは

「これから多くの方のお役に立てる様に頑張ってください。そして、その一助にお使い下さい。」と有りました。

何気なく使っていると、ふとした瞬間にその時のことを思い出し、身が引き締まる思いになります。

◆伊藤正法



ひだまり書房



『夜と霧 新版』

著 ヴィクトール・E・フランクル
訳 池田香代子

心理学の世界では有名なこの一冊。舞台は、第二次世界大戦時のドイツです。本書の冒頭は次の一文から始まります。

「心理学者、強制収容所を体験する」。これは心理学者である著者が実際に経験した、かの有名なアウシュヴィッツIIビルケナウ強制収容所における壮絶な戦争体験記です。

朝食を共にしていた仲間がお昼には横たわっていた……。石鹸を渡され、風呂場と聞いて行った先は焼却場……。無慈悲な現実。道徳観や倫理観の崩壊。

異常ともいえる状況が続く中、無気力状態に陥るも最後に希望の光として残された想いは、「愛」だったといえます。

今年には戦後七十年という節目の年。この本を通して、私は戦争の悲惨さをまた一つ考えさせられました。

◆田中仁秀